カミュ全集 1

アストゥリアスの反乱・裏と表・結婚

カミュ全集　1

編集／佐藤朔・高畠正明

新潮社版

AC カミュ全集 1

Œuvres Complètes d'Albert Camus, Tome I

Original Copyright : ÉDITIONS GALLIMARD
This book is published in Japan by arrangements with Gallimard through the Bureau des Copyrights Français.

印刷 1972年9月1日　発行 1972年9月5日
発行者　佐藤亮一
翻訳者　大久保輝臣　高畠正明　滝田文彦
装幀者　高松次郎
発行所　株式会社 新潮社　〒162 東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)260-1111(大代)　振替東京808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所
定価850円

〈乱丁・落丁本はおとりかえいたします〉 Printed in Japan 1972

《目次》

キリスト教形而上学とネオプラトニズム……滝田文彦訳 5
アストゥリアスの反乱……大久保輝臣訳 105
裏と表……高畠正明訳 135
「肯定と否定のあいだ」のための草稿断片……高畠正明訳 189
ジャン・ド・メーゾンスールへの手紙……高畠正明訳 193
結婚……高畠正明訳 195
〔詩、講演、その他小品〕
《ベリア》についてマックス・ポール・フーシェへのノート……高畠正明訳 239
地中海に寄せる詩……高畠正明訳 241
世界をのぞむ家……高畠正明訳 244
土着の文化、新しい地中海文化……高畠正明訳 245
《ヴィオレット計画のためのアルジェリア知識人のマニフェスト》……高畠正明訳 253
解題 255

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カミュ全集1

キリスト教形而上学とネオプラトニズム

（学位論文）

カタコンブの壁画に描かれたキリストは、喜んでヘルメスの顔を借りている。だが、ほほえみはおなじでも象徴の効力は変った。このようにキリスト教思想は、一貫した体系として自らを表明しなければならなくなったとき、ギリシア思想の形式中に入り込み、既成のものとして眼前にあった形而上学的表現形式によって自己を表明しようとしたのである。だが少なくとも、キリスト教思想はそれら表現形式を変容した。このように考えるならば、キリスト教の独創性を理解するためには、その深い意味あいをあきらかにするとともに、歴史的観点に立ってその起源にまでさかのぼらねばならない。この論文の目的はそこにある。けれどもどのような研究も、論理的であろうと願うなら、一、二の基本的方向に沿って整理される必要がある。当面している歴史的主題の複雑性を考慮に入れながらも、そこにいくつかの不変の要素を浮び上らせることができるという意味で、この序文によってわれわれはそうした基本的方向を明示することができるだろう。

キリスト教の独創性は、ヘレニズムとの対比においてさんざん問われてきた。明確なちがいがある一方、多くのテーマは共通している。だが実際には、一つの文明が生れようとするとき、どんな場合でも、人類の重要問題は次元の変化であり、体系の転換ではない。キリスト教の教義とギリシア哲学を比較することによっては、両者の違いを理解することはできない。それよりむしろ、福音教団が身をおいていた感情的次元は、ギリシア的感受性の古典的様相とは無縁なものであることに注目する必要があろう。キリスト教の斬新さは、問題の課せられる感情的次元のうちに求められるべきであって、それに答えようとする体系のうちにではない。キリスト教は当初においては、一哲学に対立する別の哲学ではなく、ある次元上で動き、その次元の内部で解決を求める願望の総体、一信仰であったのである。

だがここで、二つの文明においてはっきり動かしえないものについて語る前に、もう少しニュアンスを考え、問題の複雑性を考慮に入れておいたほうがよいだろう。「キリスト教精神」に対立する「ギリシア精神」を語ることは、

常に独断的なものを含んでいる。アイスキュロスと比べたソポクレス、原始的仮面とパンアテナイアのフリーズ[1]、前五世紀の香壺とパルテノンの小間壁、そしてソクラテスと並んだ神秘宗教等のすべては、光のギリシアに対立するもう一つの影のギリシア——古典的度合は少ないが、おなじく真実な影のギリシアの存在をきわだたせる。だがその一方で、一文明から一定数のその文明好みのテーマを抽出すること、そしてソクラテス式方法を借りて、ギリシア思想の内部に、構図上まさしくヘレニズムと呼ばれるものを思わせるいくつかの特権的図柄を写し取ることができるのも確実である。ギリシア思想のうちのなにかはキリスト教を予告しているとともに、またなにかはあらかじめそれを拒否しているのである。

a　差異

こうして、ギリシア人とキリスト教徒の、世界を前にしての両立しえない態度があきらかになってくる。紀元後の数世紀に示されるごとく、ヘレニズムには、人間は自らだけで足り、自らのうちに宇宙と運命を説明できるものを持っているとの主張が含まれている。その神殿は人間の尺度にあわせて造られている。ある意味では、ギリシア人は人間存在のスポーツ的、美学的正当化を受け入れていた。丘の線、あるいは広場を走る青年の姿が、彼らにとっては世界の全秘密を明かしていた。ギリシア人の福音書は、われらの「王国」はこの地上であると語っていた。それはマルクス・アウレリウス[2]の言う「宇宙よ、おまえと和合するすべてのものはわたしと和合する[3]」である。

人生に対するこうした純粋に理性的な観念——世界はすべて理解されうる——は、「道徳的知性主義」へと導いていく。すなわち、徳とは学ばれるものである。常にはっきりそうとは言わないが、ギリシア哲学者はすべて賢人を神と同等の者とみなしている。そして神は一つのより高度の知恵にすぎない以上、超自然なものは存在しない。全宇宙は人間とその努力の回りにある。したがって、道徳的悪とは無知[2]ないしは誤謬であるとすれば、どうしてこのような態度のうちに「贖罪」や「罪」の観念がはいりこむ余地があろう？

かつまた物質的秩序においては、ギリシア人は依然として永遠かつ必然的な循環的世界を信じていたのであり、そうした世界は「無からの」創造[3]、したがって世界の終末の観念とは相容れぬものであった[3]。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一般的に言って、純粋イデアの実在をあくまで信じていたギリシア人は、肉体復活のドグマを理解することができなかった。例えばケルソス、[四] ポルピュリオス、[五] ユリアヌス[六]も、この点に関してあくことない嘲笑をあびせている。このように物質的面においても、道徳あるいは形而上学的面においても、いっさいの違いは問題のたてかたにある。

だがそれと同時に、いくつかの点では共通なものがあった。ギリシア思想の最後の努力であるネオプラトニズムも、そしてまたキリスト教も、当時のあらゆる思想がぜひとも答えねばならなかった、共通の願望の基盤を考えることなしには理解されない。

b　共通の願望

これほど苦悩にさいなまれた時代は少ない。もろもろの種族や民族の驚くべき不統一のうちにあって、古いギリシア・ローマ的テーマが、オリエントからやって来た新しい叡智と混りあっていた。小アジア、シリア、エジプト、ペルシアが西欧世界に思想や思想家を送りこんでいた。[七] 当時の法律家はティル生れのウルピアヌス、[八] エレーズ生れのパピニアヌスである。プトレマイオス、[九] プロティノスはエジプト人であり、ポルピュリオス、ハムブリケはシリア人、ディアスコニデス、ガレノスはアジア人である。[一〇] 聖なる「アッティカ的」精神であるルキアノスさえ、[一一] エウフラテス河辺境コマゲーネ地方の生れである。こうして同時期に、天はグノーシス派のアイオーン、[一二] ユダヤ人のヤーヴェ、キリスト教徒の「父」、プロティノス派の「一者」、さらにはイタリアの田舎ではまだ崇拝されていたローマの古い神々によって満たされることになった。

もちろんそこには政治的、社会的理由が考えられる。コスモポリタニズム、[一三] あるいは当時の現実の経済的危機である。だが同時にまた、それはあらゆる手段によって満足を得ようとする、いくつかの情熱的権利回復の要求が生れかかっていたことに基づいている。そして、オリエントのみがこの目覚めに責任があるのではない。たしかにギリシアは当時すでに神々をはかないものと化し、魂の運命の問題はエピクロス派やストア派の理念の下に消失してしまっていた。それでもなお、ギリシア・ローマ世界は真の伝統に戻っていたのである。とは言うものの、なにかしら新しいものが感じられる。

神への欲求が高まったこの世界において、善の問題は地歩を失う。古代世界を活気づけていた生の誇りに、霊感を

求めての精神の卑下がとってかわる。瞑想の美学的次元は、希望が神の模倣[6]に自己を局限する悲劇的次元に蓋われる。人々はオシリスを探し求めるイシス[7]の痛ましい劇を演ずる。人々はディオニュソスとともに死に[8]、彼とともによみがえる[15]。キュベレ女神の司祭[ガロス]は世にも恐ろしい手足の切断をもアッティスにならって行なった[16]。エレウシス[17]では、ゼウスとデメーテルは大司祭と女司祭の姿を借りて合体する[18]。

おなじころ、世界はルクレティウス[19]の言う「万物は常に同一不変である」に向うのではなく、神なき人間の悲劇の場として役立つのだという思想が行きわたる。問題自体が具象化し、歴史哲学が誕生する。以後人々は、贖罪という世界の修正を容認するのにそれほど嫌悪を感じなくなる。認識したり理解することが問題ではない、愛することが問題なのだ。そしてキリスト教は、人間にとっての問題とは自己の本性を完全化することではなく、それを逃れることだという、はなはだギリシア的ではない考え方を確認するにすぎないと言えよう。神への欲求、卑下、まねび、ある再生への渇望等、これらすべてのテーマは地中海的パガニズムの秘儀と東方宗教のなかにあって交錯している。とりわけ紀元前二世紀以後（キュベレ女神崇拝は前二〇五年ローマに移入された[20]）主要な諸宗教は、その影響と伸展とにより不断にキリスト教への道を準備しつづけたのである。われわれの問題とする時期において、新しい問題が強く感じられるようになっている。

c　問題の位置づけと本論文の意図

このように、キリスト教を突然ギリシア文明の後をついだ新しい思想の一形体とみなすことは、問題の困難性を回避することになるだろう。ギリシアはキリスト教のなかに連続している。キリスト教自身、ギリシア思想のうちにあらかじめ形成されている。キリスト教の教義のうちに、福音の主張中には全然正当化する根拠のないギリシア的なものが付加されているのを見出すことは容易である。だが、他方、当時の思想に対するキリスト教の寄与を否定することはできないし、キリスト教哲学の概念をすべて除外することはむずかしいように思われる[21]。一つのことが共通している、それは問題を生ませる不安である。それはつまり、エピクテトスの実際的関心からプロティノスの思弁へ、パウロの内的キリスト教からギリシア教父たちの教理へと至るおなじ発展である。だがこのような混乱のなかから、キリスト教の独創的なものを見分けることができるだろう

か？　そこにこそ問題のすべてがある。

ある歴史的観点からすれば、キリスト教の主張はパレスティナに生れ、ユダヤ思想のなかに挿入される宗教的運動である。決定することの困難なある時期、だが確実にパウロが原則的に異邦人の入会を認め、彼らに割礼を受けることを免除したころ、[19] キリスト教はユダヤ教から分離する。一世紀の終り、ヨハネは「主」と「精霊」の一致を宣する。一一七年と一三〇年のあいだにおいて、バルナバの書簡[20]はすでに確固として反ユダヤ的である。これは重要な点である。キリスト教思想はここでその起源とたもとを分ち、完全にギリシア・ローマ世界に流れ込む。そして、すでに不安と神秘宗教によって用意の整っていたギリシア・ローマ世界は、ついにキリスト教を受け入れるにいたる。

以後、この二つの主張を峻別することは有意義ではないし、むしろ両者がいかに力を合わせたかを探り、両者それぞれについて、この協力関係のなかで無疵のまま残されたものを考察することの方が重要であろう。だが、こうした思想と体系との混乱中にわけ入るためには、どんなアリアドネーの糸[21]をたどったらよいか。単刀直入に、キリスト教の究極的独創性は「受肉」のテーマにあると言おう。問題は肉体をあたえられ、ギリシア精神のある種の働きにはしばしば欠けている悲劇性と必然性の性格をもつようになる。ユダヤ人たちがキリスト教を排撃し、地中海はそれを受け入れることになった後でさえ、キリスト教の深く革新的な性格は残った。そしてキリスト教思想は、いやおうなくすでに存在する哲学から既成の表現形式を借りながらも、それらを変容する。ギリシアの役割は、キリスト教思想を形而上学の方に向けることによって、普遍化することにあった。秘教がすでにこの役割を荷なうようギリシアに準備させていたし、かつまたアイスキュロスの作品やドーリアのアポロン像にさかのぼる伝統がある。こうしてキリスト教の奇蹟がギリシアの奇蹟を同化し、今日なおわれわれが深い影響を受けているほど長期に渡る、一文明の基礎をおくことができたという動きのことが説明されるのである。

われわれの任務と計画はこうして定まった。それは「ネオプラトニズム」のうちに、当時の問題に対し、とりわけギリシア的な解決をもたらそうとするギリシア哲学の努力の跡をたどることである。そしてまた自己の教理を原始宗教生活に適応させようとするキリスト教の営みを跡づけることである、――それは、すでに一つの宗教思想にあわせて形づくられていた形而上学的枠組をネオプラトニズムのうちに見出すことによって、キリスト教がアウグスティヌ

スの思想という第二の啓示のうちに花開くまでつづくのである。だがキリスト教の発展には三つの契機がある。発展の源泉である福音的キリスト教、言と肉体の和解のうちに発展が成就するアウグスティヌスの教義、認識と救霊の同一化を試みて発展がそれて行く脇道――すなわちグノーシス説[12]においていちばん完全な実例が見出される異端である。――われわれはこの福音、グノーシス、ネオプラトニズム、アウグスティヌスの思想という、ギリシア・キリスト教共通の発展の四つの段階を、歴史的順序にしたがって研究し、かつこの四つが包含される思想的動向との関係において研究したいと思う。福音的キリスト教はいっさいの思弁を排撃し、当初から「受肉」のテーマを明確にしている。グノーシスは「贖罪」と知識が混合する特殊な一解決を追求する[13]。ネオプラトニズムは理性主義と神秘主義を和解させようと試みることによって目的に到達しようとし、その表現形式の助けを借りて、キリスト教教義が聖アウグスティヌスにおいて「受肉」の形而上学として成立することを可能ならしめる。同時にまた、ネオプラトニズムはここで証拠としての学説の役を果している。ネオプラトニズムに生気をあたえるのはキリスト教思想を動かすのとおなじものである、だが受肉の観念はネオプラトニズムとは無縁である。

六世紀以後、はやくもこの運動は燃えつきる。「ネオプラトニズムは全ギリシア哲学、全ギリシア文化とともに死滅する。六世紀そして七世紀は大いなる沈黙の期間である[14]」

原注

(1) 『自省録』四の二三。「宇宙よ、おまえと和合するすべてのものはわたしと和合する。おまえにとってちょうどよい時機に起ることは、なにものも早すぎることも遅すぎることもない。自然よ、わたしは季節のもたらすものをわが果実とする。おまえからすべてが生れ、おまえのなかにすべてがあり、おまえにすべてが向う」

(2) エピクテトス（訳注　一世紀のストア派哲学者）『語録』一の七参照。「よこしまな者を正すことができないならば、彼らを非難してはならない。なぜなら、あらゆる邪悪は矯正可能だからである。それより自分を非難せよ。自分のうちに、彼らを善に導くことができる雄弁と忍耐の持ち合せがないからである」

(3) アリストテレス『問題集』一八の三。「事件のつながりがもし円環であるなら、円環は始めも終りもないものだから、われわれは始めにより近いところにいるからといって、あの人々（トロイア戦争当時の人々）より前代の人間ではありえない。同様に、彼らもまたわれわれより前代の人間ではありえない」（ルージエ『ケルソス』第二章、七六ページに引用）。さらにまた、プロティノス（訳注　後出『エンネアデス』）二の九の七参照。

(4) F・キュモン『ローマ時代の異教における東方宗教』参照。

(5) アレクサンドロス大王はオリエント遠征において、四十以上のギリシア式都市を建設した。

(6) エレウシスの清めの儀式における「新しき人間」参照。「プリモ女神はプリモスを産んだ」『フィロソフメナ』五の八。――ロワジー『異教の秘儀とキリスト教の秘儀』第四章、一三九ページ引用のプルタルコス「イシスとオシリスについて」二七を参照。「テュポン（訳注　巨大な怪物）の怒りを抑圧し圧殺した後、（イシス）は自分のつづけてきた激しい闘いが……忘却と沈黙のうちに沈んでしまうのを欲しなかった。そこで彼女は、自己の戦闘の苦痛が映像と寓意と比喩的な場面によって表わされるような、ごく簡単な秘伝伝授の儀式を作った」

(7) ロワジー、前掲書、第一章参照。

(8) キュモン、前掲書付録「バッカスの秘儀」参照。

(9) キュモン、第三章。

(10) ロワジー、第二章。

(11) 『フランス哲学会誌』一九三一年三月号。『ルヴュ・ド・メタフィジック・エ・ド・モラル』誌（ブレイエ）一九三一年四月号。同一九三二年七月号（スーリオー）。

(12) すなわち一世紀のなかごろ。

(13) エミール・ブレイエ『哲学史』第一巻、第二部第七章、四八四ページ。

訳注

(一) パルテノン神殿の内陣外壁を飾る、女神アテナの大祭を描くイオニア式フリーズ。

(二) 二世紀のローマ皇帝。ストア派哲学者。

(三) ルクレティウス、エピクロスの哲学を要約する言葉は「無からはなにものも生れぬ」であった。

(四) 二世紀の折衷的哲学者。最古の反キリスト教著作『真の言葉』を書く。

(五) 三世紀のネオプラトニズム哲学者。プロティノスの弟子。『キリスト教論破』を書く。

(六) ローマ皇帝・背教者ユリアヌス？

(七) 今日のレバノンの町。

(八) ともに二、三世紀ローマの代表的法律家。

(九) アレクサンドリアの名高い天文・地理学者。

(一〇) 本論文の一中心となるネオプラトニズムの祖（二〇四―二六九頃）。

(一一) ペルガモン生れの医師。折衷主義哲学者。最高の医学の権威として中世まで崇拝される。

(一二) 二世紀のソフィスト。

(一三) 後出。グノーシス派の中心的観念の一つ。

(一四) エジプト神話。冥府の神オシリスは兄弟に殺されたが、妹妻イシスが八つ裂きにされた死体を集めてよみがえらせる。

(一五) ディオニュソスは後代にはオシリス、ザグレウスと同一視された。

(一六) アッティスは大地女神キュベレに愛された美少年。狂って自ら去勢して死ぬ。後のキュベレ崇拝では、司祭たちは自ら男根を切断した。

(一七) アッティカの町。デメーテルを祭る秘儀で名高い。

(一八) 前一世紀のローマの哲学詩人。

(一九) キュベレ崇拝は帝政ローマにあって、四世紀のキリスト教普及まで非常に盛んだった。

(二〇) 十二使徒の一人バルナバの書いたものと称す。ユダヤの掟の廃止を主張。

(二一) 手がかりの意味。

(二二) 後出。第二章。

(二三) グノーシスは元来ギリシア語で「知識」を意味する。

第一章　福音的キリスト教

「福音的キリスト教」を一括して語ることは困難である。だがすくなくとも、後の発展の源泉となるある種の精神状態をあきらかにすることは可能である。特権的テーマ——当時のキリスト教思想の中心にあり、すべてがそこに集中するテーマ——そして当時の願望の自然な解決であるのは「受肉」である。「受肉」とはつまり、イエス・キリストの人間存在のなかで聖なるものと肉体的なものが触れ合うことである。それは人間の罪と悲惨を一身に負うある神の驚くべき冒険であり、「贖い」の象徴とみなされた卑下と屈従である。だがこの観念は、今ここでわれわれがあきらかにしようとする種々の願望全体の集約された帰結として存在する。

福音的キリスト教徒のうちには二つの精神状態がある。すなわち、ペシミズムと希望である。ある悲劇的な次元での発展をつづけながら、当時の人類はもはや神のなかにしか憩わず、よりよき運命への一切の希望を神の手に委ねて神のみを渇望し、「宇宙」のうちに神のみを見、信仰以外のあらゆる関心を放棄し、そして神のうちに上昇への欲求によって引き裂かれた不安の象徴そのものを具現させる。世界と神のどちらかを選ばなければならない。キリスト教のこうした二つの様相こそ、われわれが第一部において順次検討してゆかなければならないものであろう。ついで当時の時代環境と文学とを研究することによって、福音的キリスト教に生きる人々間における異なったテーマがあきらかにされるだろう。

もっとも確実なのは、新約のテクストそのものにさかのぼって検討することであった。しかしながら補助的手段としては、その都度できるかぎり異教徒の論戦家の主張を参照することである。[1] 事実、彼らの非難はわれわれに、キリスト教のなかで当時のギリシア人に不快に感じられたにちがいないことをかなり正確に把握させてくれるし、したがってキリスト教のもたらした新しいものを教えてくれるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com